The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上博楚簡『有皇将起』小考
Author(s)	福田, 一也
Citation	中国研究集刊. 2012, 55, p. 80-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58670
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　剣号（総五十五号）平成二十四年十二月　八〇―九五頁

上博楚簡『有皇将起』小考

福田一也

序言

馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（八）』（上海古籍出版社、二〇一一年五月）に、『李頌』・『蘭賦』・『有皇将起』・『鷗鷊』と題された詩篇が収録されている。これらの整理を担当した曹錦炎氏は、『李頌』・『有皇将起』・『鷗鷊』については「楚辞体」、『蘭賦』については「賦体」と評するなど、『楚辞』との関係に着目する。『楚辞』などに多くみえる語気詞の「兮」が句末に使用されている点や（『蘭賦』を除く）、『楚辞』と同じく「余」という一人称が用いられている点（『有皇将起』・『鷗鷊』）[1]がその主な根拠であり、これらの文献は『楚辞』の形成と発展の歴史を研究する一助となると曹氏は述べる。

確かに、上博楚簡中には南方の楚国と関わりの深い文献が多く含まれており[2]、語気詞などの面で南方の特徴を備えていることから、上記の詩篇は『楚辞』の成立を考える上で重要な手掛かりを提供しているといえる。そしてこの問題は、今後の大きな課題となってくるであろう。だが、今回発表された詩篇中には、内容的に『楚辞』と重なる文句などはみえず、細かくみると語気詞の用法も『楚辞』とは異なっている。「楚辞体」や「賦体」といっても、『楚辞』との強固な関係性が見出されるというわけではないのである。そこで本稿では、『楚辞』との関連はひとまず置き、上記四篇中の『有皇将起』に焦点を当て、考察を試みることとしたい。

『有皇将起』の内容に関して、整理者の曹錦炎氏は、

「説明」の中で次のように解説する。

本篇は楚辞体の作品であり、今本には見えない。内容よりみると、詩人は楚国の上層の知識人であり、貴族の子弟を教育する保傅の職を担当し、思うところがあってこれを作成した。作者は、「惟余教保子」・「能為余拜楮柧」という人物であり、「思遊於愛」・「能與余相惠」を願っている。一方では学生を「慮余子其速長」・「又不善心耳」・「如女子將眯」と心配し、一方では学生を「何哀成夫」と戒め、「周流天下」・「將莫惶」と鼓舞している。切々とした愛情が言葉上にあふれているのがわかる。同時に作者は、「三夫之謗」・「膠膰誘」など、すなわち小人が教職につく動機が不純であると誹謗することに対して憤慨の情を表しており、この点はとても屈原作品の趣を有しているといえる。

曹錦炎氏は、本詩の作者は楚国における貴族の教育係であり、学生の成長を案じて時には戒め、時には鼓舞するといった作者の愛情が詩にあふれているとする。また、小人からの中傷誹謗に対する憤慨の情も看取され、この点は屈原作品に通ずるとも評す。

確かに、本詩（全六簡）の第一簡から第五簡において、作者はその教え子とみられる「保子」に対して、さまざまな訓戒を施しており、その成長を願う言葉が随所に看取される。したがって、教育者である作者が子弟の将来を案じて詠んだ詩とする曹氏の基本理解は妥当であるといえよう。だが、こうした基調から一転し、末尾の第六簡において作者は、自分を誹る小人たちに向けて憤りの言葉を発する。曹氏は、小人が作者を非難するのは「教職につく動機が不純である」ためと推測するが、いずれにしてもなぜ末尾において突如このような話が持ち出されるのかについては判然としない。一連の教え子への愛情と末尾の小人に対する憤慨とは、一体、どのような関連性をもつのであろうか。

本詩は全六簡が残存するが、上半部や下半部が欠損している簡もあり、竹簡の配列の確定が非常に困難である。また、詩という性格上、説話など物語性を有するものとは異なり、内容からも詩句の前後関係を特定しがたい。さらに、本詩中には特定の人物や事件などはみえず、詩の背景を知る手掛かりがないことも本詩の理解をより困難なものにしている。

こうした数々の資料的制約もあり、今までのところ、整理者以外に本詩の全体理解に言及した論考は提出され

ていない。しかしながら現在では、個々の文字の釈読に関しては、復旦吉大古文字専業研究生聯合読書会（以下、「聯合読書会」と省略）をはじめとする諸家の説が提出されており、これらの成果をふまえることで、より精度の高い釈読が可能となってきている。

そこで本稿では、諸家の説を参考にしながら再度本詩の釈読を行う。そしてその上で上記の問題について考え、詩全体を整合的に解釈するための一つの推論を提示してみたいと思う。

一、書誌情報

曹錦炎氏の「説明」などを参考に、『有皇将起』の書誌情報について記しておく。

篇名は、整理者が冒頭の四字（「有皇将起」）を取って命名した仮題である。全六簡。三道編綫。簡長は約四二cmで、簡端から第一契口までは約一・三cm、第一契口から第二契口までは約二三cm。第二契口から第三編縄までは約十六cm。各簡の字数は約三九字であり、全体で一八六字（重文三字を含む）を存する。竹簡の状態は一定せず、六簡すべてにわたって第三編縄から簡末にかけて欠損がみえるほか、第二契口のやや上のあたりに折れて断絶した痕がある。第一簡・第四簡・第六簡は、上下の竹簡を繋いで一簡としているが、第三簡は上部のみ、第二簡と第五簡は下部のみを存する。

形式上の最も大きな特徴は、各句末に二字の語気詞「今兮」がみえる点である。そして第六簡には、これに加えて「也今兮」という三字の語気詞も登場する。語気詞の「兮」は『詩経』にもみえるが、『楚辞』などで最も多用されるものであり、本詩と南方との強い関連性を窺わせる。ただし、『楚辞』では「兮」は一字で使用され、「今兮」や「也今兮」など、二字や三字の語気詞は使用されない。この点は、両者の相違点として注目されよう。語気詞を除く各句の字数は三字～七字と一定しないが、四字句や五字句のものが最も多くみえる。

配列に関して第一簡は、「有皇将起～」と句首から記されており、鳳凰が立ちあがるさまを詠んだその内容からも本詩の冒頭と考えられる。また、第六簡の最後には墨鉤が記されており、第六簡は本詩全体の末尾と考えて問題ないであろう。しかしながら、中間の第二簡から第五簡にかけては、竹簡の保存状態が悪く、相互の連続性は把握しがたい。内容的な関連性が看取される箇所もないではないが、相互の前後関係は不明で、欠損箇所以外にもいくつかの脱簡があると推測される。したがって、

本詩を読解する際には、各簡ごとにその内容を把握し、その上で関連部分を抽出・総合しながら分析を加える必要がある。

なお、最後に同じく第八分冊に所収されている『鶹鶹』との関係について付言しておく。『鶹鶹』は全二簡が残存しており、竹簡の形制・第一人称「余」の使用・字体などの面において『有皇将起』と酷似する。すなわち、両者は同冊の竹簡に書写されていた可能性も考えられるのである。しかしながら、『鶹鶹』と『有皇将起』とは、語彙や主題などの面において同一の詩とは認めがたいところがあり(3)、両者を別々の篇とする整理者の判断は正しいと思われる。

二、『有皇将起』釈読

以下に『有皇将起』の釈文と訓読、及び現代語訳を載せる。釈文は、基本的に『上海博物館蔵戦国楚竹書(八)』に依拠するが、聯合読書会をはじめ、インターネット上に発表されている諸論文を参考に文字を改めた箇所がある。【 】内の数字は、竹簡の整理番号。なお、本稿では『有皇将起』の全体的な把握を主とするため、釈文中の文字は極力通行の字体を使用し、文字等の考証に関しても、重要な箇所に関してのみ記すことにする。

【第一簡】

又（有）皇(4)（凰）將起含（今）可（兮）(5)
蠆(6)（助）余教保子(7)含（今）可（兮）
囟(8)（思）遊於仁(9)含（今）可（兮）
能與余相蠆（助）含（今）可〓（兮）
可（何）幾(10)成夫含（今）可（兮）
能為余拜楮柧(11)含（今）可（兮）

凰有りて將に起たんとす
余の教えし保子を助けん
思うらくは仁に遊び
能く余と相助けん
何幾か夫と成り
能く余の為めに楮柧を拜け

鳳凰（若君）がまさに独り立ちしようとしている
私が教え育てたこの若君の力となろう
願わくは仁に親しみ
ともに助けあっていこう
いつか立派な成人となり

私のために害を除いてほしい

【第二簡】

……自誨[12]（悔）含（今）可（兮）
有過而能改含（今）可（兮）
亡郄[13]（奉）有風（諷）含（今）可（兮）
同郄（奉）異心含（今）可（兮）
郄有（奉）……

……自（みずか）ら悔い
過有らば能く改めよ
奉（へつらい）亡（な）きは諷有り
同（とも）に奉（へつら）うは心を異にす
奉有るは……

……自分自身で反省し
過ちがあれば改めよ
諂わない者は諫言し
同調して諂う者は（君と）思いを異にする
諂う者は……

【第三簡】

……大迻[14]（路）含（今）可（兮）
敦蔵與楮[15]含（今）可（兮）
慮余子其速長……

……大路
蔵と楮とを敦し
余子の其れ速く長ぜんことを慮（おも）う

……大路
蔵や楮などの悪木を生い茂らせる
我が教え子の一刻も早い成長を願う

【第四簡】

……含（今）可（兮）
離尻[16]而同欲含（今）可（兮）
周流天下含（今）可（兮）
將慕[17]皇（凰）含（今）可（兮）
有不善心耳含（今）可（兮）
莫不弁（變）改含（今）可（兮）
女〓[18]（如女）子將深[19]（泣）含（今）可（兮）

……今兮
離れて尻(お)るも欲を同じくせん
天下に周流するも
將に凰を慕わんとす
心耳に善からざること有るも
變改せざること莫(なか)れ
女子の如く將に泣かんとす

……今兮
離れていても思いは一つ
世界を流浪しようとも
鳳凰（若君）のことを思っております
耳に逆らい心を害することでも
自身を改めていきなさい
女子のように泣くときは

【第五簡】

……若(20)余子力含（今）可（兮）
族（奏）戀〓（緩緩）(21) 必慎毋瑩（勞）含（今）可（兮）
日月卲（昭）明含（今）可（兮）
視毋以三誑(22)……

……若し余子の力(つと)むるも
奏緩緩として必ず慎しみて勞する毋れ
日月は昭明し
三誑を以(もち)うること毋きを視(しめ)す……

もし力を尽くすときは
ゆっくり慎重にして疲れないように
日月は輝き照らし
いかなる偽りも行われないことを示す

【第六簡】

……也含（今）可（兮）
論（命）(23) 三夫之旁（謗）(24) 也含（今）可（兮）
膠膰(25)誘余含（今）可（兮）
蜀(26)（獨）論（命）三夫含（今）可（兮）
膠膰之腈(27)（精）也含（今）可（兮）
論（命）夫三夫之禃(28)（請）也含（今）可（兮）■

……也今兮
三夫の謗(そし)るものに命(つ)げん
膠膰(こうはん)もて余を誘え
獨だ三夫に命(つ)げん

膠膰の精なるを
夫の三夫の請めしものに命げん■

……也今兮
我を誹謗する小人たちに告げておく
報酬の肉を準備して私を誘え
ただ小人たちに告げておく
報酬の肉は立派なものを
私に不当な要求をする小人たちに告げておく

［参考文献］

●「復旦大学出土文献与古文字研究中心」（「復旦網」）
（http://www.gwz.fudan.edu.cn）
・復旦吉大古文字専業研究生聯合読書会「上博八『有皇将起』校読」（「復旦網」、二〇一一年七月十七日）
・「網摘『上博八』専輯」（鐘碩整理、「復旦網」、二〇一一年十月一日）
※この論考は、前掲「聯合読書会」の内容に対するネット上のコメントを編集したものであり、本稿では蔣文・鄔可晶・高佑仁・程少軒・秦樺林などの意見を参考にした。正式な論文の形式をとっておらず、ペンネームのものもあるが、中には貴重な意見もあるので、論文に準ずるものとして掲げておく。

●「簡帛網」（http://www.bsm.org.cn/）
・黄傑「上博簡『有皇将起』編連一則」（「簡帛網」、二〇一一年七月十九日）
・張峰「『上博（八）・有皇将起』讀書筆記」（「簡帛網」、二〇一一年七月二四日）

三、第一簡～第五簡の内容

上記の釈読をもとに、本詩の内容について分析を試みたい。行論の都合上、まず第一簡～第五簡についてみていくことにする。

本詩の作者は「余」という一人称で登場する。これは既に指摘されているように、『楚辞』などにも類例がみえる。それでは一体、「余」とはどのような人物なのであろうか。この点に関しては、「余」が本詩の中で関心をよせる「保子」・「余子」との関係から推測しうる。「保子」について整理者は、『大戴礼記』王言篇の「上の下に親しむこと腹心の如くすれば、則ち下の上に親しむこと保子の慈母を見るが如し」を引用し、元来は嬰児の

意であることを示した上で、ここでは未成年の貴族の子弟、中でも楚国の君位の継承者である可能性が高いと指摘する。第一簡に「余の教えし保子」とあり、作者の「余」は「保子」の教育を担当する人物と推察される。したがって、整理者の「保傅之職」に相当するとの指摘は妥当であるといえよう。

次に「保子」について考えてみる。「何幾(いつ)か夫と成り」（第一簡）や「余子の其れ速く長ぜんことを慮う」（第三簡）という表現から、「保子」はいまだ成人しておらず、作者はその一刻も早い成長を願っていることがわかる。また、「女子の如く將に泣かんとす」（第四簡）とあることからすると、「保子」はまだ幼少であると考えられる。正確な年齢は不明だが、十歳前後（或いはそれ以下）の男子とみておくのがよいであろう。さらに、この幼い「保子」に対して、作者は「過有らば能く改めよ」（第二簡）など、過ちがあればそれを素直に受け止め、己を正すことを求める。そして、注目すべきは、これに続けて「奉亡(へつらいな)きは諷有り」・「同(とも)に奉(へつら)うは心を異にす」など、臣下の諫言に関する言及がみえる点である。その内容については後述するが、いずれにしてもこれは臣下の存在を前提とした発言であり、「保子」は将来臣下を従える君主の地位に立つ人物と考えられていることがわかる。

前述の如く、本詩には『楚辞』などに特徴的な語気詞の「兮」が多用されており、また、同じく出土した竹簡群には楚王に関する説話が多く含まれるなど、楚国との関連が示唆される。したがって、本詩の作者は楚人である可能性が高く、そうであれば「保子」とは楚国の貴族の子弟であり、将来は君主として政務を担う人物ということになる。以上のことを総合すると、「保子」とは整理者が述べるように、楚国の君位の継承者、すなわち楚国の太子を指す可能性が高いと考えられる。

これと関連して考えてみたいのが、冒頭の「皇（鳳）有りて將に起たんとす」という一句である。この句に関しては、「皇」を鳳凰とする説や、「皇」のままで君と解釈する説など、多様な解釈が存在する。しかしながら、鳳凰と解した場合でも、これを瑞鳥の鳳凰そのものと考えるのにはいささか難点がある。『楚辞』中には、しばしば鳳凰が登場するが、鳳凰の動作としては「起つ」（立ち上がる）という表現はみえないからである。ここの文脈から推測すると、「有皇」の「皇」は、「皇(きみ)」と読んで君主の意ととるか、もしくは鳳凰と解する場合でも、幼い「保子」が自立する様子をたとえたもので、いずれにしても将来国政を担う人物を指すと考えられる。

以上の考察により、本詩は、養育者・教育者である作

者が、幼い「保子」の行く末を案じて詠んだものであることを確認した。では、続けてその内容についてみていくことにしよう。

作者は、「何幾か夫と成り」（第一簡）や「余子の其れ速く長ぜんことを慮う」（第一簡）のように、「保子」の速やかな成長を願い、成長後は、「能く余と相助けん」（第一簡）と自分と助け合うことを期待している。また、「能く余の為めに楮柧を拜け」（第一簡）と、作者のために「楮柧」（悪木）などの害を取り除いてくれるよう願ってもいる。こうした「保子」の成長に必要不可欠なのが、己の過誤を正してくれる臣下の言葉に耳を傾け、自身を変革していくことであった。「……自ら悔い」・「過有らば能く改めよ」（第二簡）と、自己の過失を改める必要性を述べた後、作者は「奉亡きは諷有り」・「同に奉うは心を異にす」（第二簡）と、諫言を行う臣下について言及する。君主に諂わない臣下こそがよく諫言を行うことができ、君主に同調して諂う者の心中は、君主とは全く異なっているという。すなわち、諫言を行う臣下こそが行動をともにすべき真の臣下であり、その諫言を受け入れて自身を変革する必要性を説くのである。「心耳に善からざること有るも」・「變改せざること莫れ」（第四簡）という句も同様である。君主にとって臣下の諫言は耳に痛く、往々にして心を害するものである。しかしながら、それにあえて耳を傾けることこそが、自分を改変し、成長させる手段であるという。臣下の諫言はひとえに君主のためなのだと、ここで作者は、「保子」を教導してきた己の姿と重ね合わせながら語っているのかも知れない。

こうした訓戒がみえる一方で、第五簡には「保子」の身を気遣う言葉も看取される。「……若し余子の力むるも」・「奏緩緩として必ず慎しみて勞する毋れ」と、力を尽くすときも、ゆっくり慎重にして決して心身を疲れさせないようにと作者は助言する。ここには、作者の「保子」に対する思いやりの心が窺われよう。

では、作者は今後も「保子」の養育に携わっていくのであろうか。この点に関しては、第四簡の「離れて屁るも欲を同じくせん」という一句が注目される。ここでは、作者と教え子の「保子」とが別々の場所にいることを前提として、離れていても心を一つにしようとの願いが詠みこまれる。

通常、保傅の職にあるものは、常に被養育者の身辺に控えて教導するものである。例えば、斉の管仲や鮑叔は、斉の公子糾や公子小白に「傅」（守り役）として仕え、常に身辺に侍って行動をともにしている。お仕えし

た若君の栄達は、自身の栄達にも直結するのであり、いわば両者は一心同体といえる。ところがここでは、両者は「離れて尻る」ことが想定されている。すなわち、今後作者と「保子」とは別々の場所で暮らすのであり、以後、作者は「保子」の養育者ではなくなるものと考えられる。続く「天下に周流するも」・「將に凰を慕わんとす」という部分もこれと関係していよう。天下を流浪して離ればなれになっても、いつも「凰」（「保子」を指す）のことを案じていると作者はいう。この言葉からも、やはり両者は離別する運命にあることがわかるであろう。

では、「天下に周流する」のは、「保子」の側であろうか、それとも作者の側であろうか。本詩が如何なる背景のもとに作成されたのかについては、詩中に特定の人物や固有名詞等が登場しないこともあり、詳細は明らかにし難い。しかしながら、両者が離別するに至った要因とも考えられるのが、第六簡に記される内容である。

そこで次節では、詩の末尾に位置する第六簡の内容について分析を試みることにする。

四、第六簡の内容

【第六簡】

①……也今兮　……
②命三夫之謗也今兮　三夫の謗るものに命げん
③膠膰誘余今兮　膠膰もて余を誘え
④獨命三夫今兮　獨だ三夫に命げん
⑤膠膰之精也今兮　膠膰の精なるを
⑥命夫三夫之請也今兮■　夫の三夫の請めしものに命げん■

末尾に墨鉤が付されていることから、第六簡は本詩の最後に位置していたことがわかる。特徴的なのは、二字の語気詞「今兮」（③④）に加えて、三字の語気詞「也今兮」（①②⑤⑥）もみえる点である。また、②④⑥にはいずれも「三夫」の語が登場し、③と⑤には「膠膰」という共通の語が存在する。こうした形式上の特徴からみると、第六簡は①と②、③と④、⑤と⑥の二句で一組をなし、この三組の対句的表現によって本詩は締め括られていたと考えられる。

かかる形式上の特徴をふまえた上で、第六簡の内容を考察してみよう。整理者は、「三夫」とは多勢の人を指

すとし、②の「三夫之謗」とは、多くの人が誹謗中傷する意であるとする。「三夫の謗るものに命げん」とあることから、その誹謗は作者に向けられたものであり、作者はそうした自分を誹る人々に対して言葉を発している。これは④⑥においても同様であり、⑥にみえる「三夫之請」というのも、②の「三夫之謗」と同様に、作者を批判する人々から受けた要求・要請を指すと思われる。整理者は、報酬を目当てに保傅の職についたことに対する批判であると推測する。しかしながら、「膠膰もて余を誘え」や「膠膰の精なるを」とは、「三夫」に対する作者の言葉であり、「三夫」からの批判の内容ではない。作者が如何なる理由によって人々の誹りを受けるに至ったのかについては不明だが、第六簡が作者を非難する人々に向けられた怒りの言葉であることは確かであろう。

ここで思い起こされるのが、第四簡の「離れて尻(お)るも欲を同じくせん」・「天下に周流するも」・「將に凰を慕わんとす」という文章である。作者と「保子」とは今後離れて暮らすことになるのだが、その原因は作者がこうした世間の批判にさらされたことにあったのではなかろうか。何らかの事情により世間の批判を浴びた作者は、もはや国内へとどまることはできずに退去を余儀なくされ、天下を流浪することになった。このように考えると、「離れて尻る」事態を生じたことにも説明がつく。

自分を批判する人々に対して、作者は「膠膰もて余を誘え」・「膠膰の精なるを」とあるように、「膠膰」を請求する。「膠」とは古代の学校、「膰」は祭祀用の肉を指すことから、ここでは教育に対する報酬を意味すると思われる。しかしながら、作者が訴えかけているのは自分を誹謗する人々であり、ここで単にこれまでの教育の代価を求めているとは考えにくい。「三夫の謗るものに命げん」のように、かなり強い調子で憤懣の情を発していることからすれば、これは大勢の非難を受けて去りゆく作者が、「(今度逢うときには)立派な報酬を用意しておけ」というような意味で言い放った、捨て台詞的な言葉であると考えられる。

さらに、作者の憤りを表明した第六簡と関連すると思われるのが、第五簡の「日月は昭明し」・「三誑を以うること毋きを視す」という句である。第六簡に登場する「三夫」との関連で考えると、「三誑」とは、作者を批判する「三夫」たちの偽りや悪事を指すと考えられる。日月の光は必ずやそれを暴き出すので、決して不正が用いられることはないと作者は叫ぶ。この言葉の中には、作者が受けた不当な誹りへの怒りが込められているのでは

なかろうか。

第一簡から第五簡までの内容のみで解するならば、本詩は教育者たる作者が教え子の行く末を案じて詠んだものとだけ解しても問題はない。「保子」との別れに関しても、特別な事情を読み込む必要はなく、単に「保子」が成長して作者の手を離れることになったと解すればよいであろう。しかし、そうであれば、第六簡において憤慨の情を発する必然性もなくなり、詩全体を整合的に理解することができなくなる。やはり、「三夫」に対する怒りと、「保子」との離別とは、密接な関わりをもつと考えねばならないであろう。

世間の批判に抗しきれず「保子」のもとを離れる作者ではあったが、将来においてこれを挽回する一縷の望みもあったようである。それは、自分が手塩にかけて育てた「保子」が成人し、恩師たる作者に復帰の機会を与えてくれることである。「蔵と楮を敦し」（第三簡）とあるように、作者の周囲には悪木（批判者）がはびこり、現状は如何ともしがたい状況にあった。しかし、「保子」が成長して君主となったならば、その師であった作者にも再び光りが当たるはずである。「能く余と相助けん」・「能く余の為めに楮(ちょこ)柧を拜(ぬ)け」（第一簡）とあるのは、将来において「保子」が作者を助け、この状況を挽回してくれることを期待しての言葉ではないであろうか。「余子の其れ速く長ぜんことを慮う」（第三簡）と、「保子」の成長をいささか焦った様子で懇願するのも、かかる作者の境遇と深く関連しているように思われる。

結語

以上の考察をまとめると、以下のようになろう。

本詩の作者は、まだ幼いが将来は国政を担うであろう「保子」の教育係であった。しかし、何からの事情によって世間の批判を浴びることとなり、その職を解かれ（または辞退して）、「保子」と離別するという事態に陥る。作者は「保子」の将来を案ずるとともに、自分を批判する者たちへ怒りをあらわにする。そして、この状況を打開するわずかな望みを「保子」の成長に託した。そうした作者の複雑な心情を読み込んだものが本詩であると。

確かに本詩は、教育者たる作者が教え子の行く末を案じて詠んだものではあろう。しかしながら、詩中からは傍らで教え子を見守るというような微笑ましさよりもむしろ、鬱屈した情念のようなものが感じられる。こうした断片的な内容からは、必ずしも作者が蒙った境遇などは明らかにならず、推測の域を出ない部分も多々ある

が、本詩全体を整合的に理解する一つの推論として提示しておきたい。

（1）曹錦炎氏は、前掲『上海博物館蔵戦国楚竹書（八）』「有皇将起」の「説明」で、『楚辞』においても主に第一人称の「余」が使用されており、その使用率は「予」・「吾」・「我」・「朕」などの総和よりも多いとして、『有皇将起』と『楚辞』との関連性を強調する。

（2）上博楚簡中には、春秋の五覇として有名な楚の荘王が登場する『荘王既成』・『鄭子家喪』のほか、霊王（『申公臣霊王』）、平王（『平王問鄭寿』・『平王与王子木』）、昭王（『昭王毀室』・『昭王与龔子胙』）、簡王（『柬大王泊旱』）といった歴代の楚王に関する説話がみえる。また、馬承源主編『上博館蔵戦国楚竹書（一）』（上海古籍出版社、二〇〇一年）の「前言：戦国楚竹書的発現保護和整理」では、上博楚簡は湖北省から出土したとの噂があるが確証はないとした上で、種々の状況や郭店楚簡との比較から、上博楚簡は楚が郢から遷都する以前の貴族の墓に副葬されていた可能性が高いと述べている。

（3）『鶹鶀』には、第一簡の六句中、四句に「鶹鶀」（梟を指す）が登場する。梟は貪欲な鳥であり、『楚辞』七諫・怨世には「梟鴞は既な以て羣を成す」とみえる。本詩において「鶹鶀」は、「衣を欲して梟を悪み」と立派な服（衣）を欲し、麻の衣服（梟）を嫌うとされたり、また「織らずして衣を欲す」と仕事をせずに利益のみを欲する輩として描かれている。すなわち、『鶹鶀』では「鶹鶀」になぞらえて貪欲な人々を批判する内容となっているのである。一方で『有皇将起』には、『鶹鶀』で繰り返し登場する「鶹鶀」の語はみえず、また「鶹鶀」が欲する「衣」への言及もない。また、教え子への心情や教誨を詠む『有皇将起』と貪欲をテーマとした『鶹鶀』とは主題が異なっている。

（4）原釈文は、「皇」は鳥名で、後世の字では「凰」と記すとする。蒋文は、「皇」を「凰」に読む明確な根拠はないとし、「有皇」とは「皇皇」で「將起」の修飾語、「有皇將起」とは、本篇が描写する主体であり、単に興起の意であろうとする。郾可晶は、「有皇將起」の「皇」は遑暇の「遑」で「有遑」であり、第四簡「將莫皇今兮」の「莫皇」と対をなすと指摘する。確かに、蒋文のいうように「皇」を「凰」とする明確な根拠はないものの、鳳凰にたとえて描写した可能性は十分にある。しかし、それを瑞鳥の鳳凰そのものと考えるのにはいささか難点がある。『楚辞』などには、しばしば鳳凰が登場するが、鳳凰の動作としては「吾令鳳鳥飛騰」（離騒篇）、「鳳皇翼其承旂、高翔翺之翼翼」（離騒篇）など、飛翔する表現が用いられており、「起つ」（立ち上がる）という表現はみえない。ここ

の文脈からすると、「有皇」の「皇」は、「皇（きみ）」と読んで君主の意ととるか、もしくは鳳凰と解する場合でも、幼い「保子」が立ち上がる様に喩えたもので、いずれも将来国政を担う人物を指すと考えられる。

（5）「含可」について、原釈文は「含兮」に読み、二字の語気詞とする。聯合読書会は「含」字を「今」字として表記する。「含」字は楚簡中において「今」の異体字としてみえることから、以降もすべて「今」字で記すこととする。

（6）原釈文は「叀」字に隷定し、語気詞の「惟」の意として『尚書』の用例をあげる。聯合読書会は「叀」字とし、「助」に解する。該字は、下文にも再度登場し、そこでは原釈文・聯合読書会ともに「助」字の意としている。両所とも聯合読書会のように、統一的に「助」字で解釈するのがよいであろう。

（7）原釈文は、「保子」に関して、もともとは嬰児の意として『大戴礼記』王言篇の「上の下に親しむこと腹心の如くすれば、則ち下の上に親しむこと保子の慈母を見るが如し」を引用する。そしてここでは未成年の貴族の子弟を指すとした上で、楚国の君位を継承する嗣君の可能性が高いとする。聯合読書会は、「保子」の用例は文献にみえないとするが、『大戴礼記』に用例があることから、ここでは原釈文に従って読む。

（8）原釈文は「囟」を「思」と読み、希冀の意とする。

（9）原釈文は「忑」字として「愛」字に解釈するが、聯合読書会は「忑」字の上部が「愛」とは異なるとして「仁」字に読む。ここでは聯合読書会の説に従う。

（10）原釈文は、前句の「可」字の下に重文符号があるとし、「可（何）哀城夫」と釈読する。聯合読書会は、整理者の「哀」字の隷定に関して、明らかに字形が合わないとして「可幾」に隷定し、「幾」は「冀」に通じて、希望の意であるとする。張峰は、「幾」は「期」の意であり、「何期」は何時の意とする。意味上は張峰説が最も通りがよいので、これに従うこととする。

（11）原釈文は、「楮柧」とは楮木製の木牘で、書を学び字を識ることを指すとし、「能為余拜楮柧」とは、自分を師と仰いで教育を受けることと解する。聯合読書会は、『詩経』甘棠の「勿剪勿拜」（剪（き）る勿れ拜（ぬ）く勿れ）を例に挙げ、「拜」とは「拜（ぬ）く」意である可能性を指摘する。鄔可晶は聯合読書会の見解に賛同し、さらに「楮」は悪木であり、「柧」も同類であるとして、『詩経』小雅・鶴鳴の疏を例証とする。そして、これはある師保が苦労して公子を成人とし、自分のために悪人を排除してくれることを期待していたが、公子は成人後に悪影響を受けて師保と心を異にし、そこで師保は泣いて諫め、公子の「有過而能改」を望んだと解する。公子が成人後に悪影響を受け師保と心を異にする云々は、詩の後半部の解釈にもよるが、「楮」・「柧」は悪木で、作者のためにこれを排除することを願っているとする鄔可晶の指摘は参考に値しよう。

(12) 原釈文は、「謀」を「誨」に読み、高佑仁は、「自誨」とは「自謀」の意とする。程少軒は、「自誨」と「改過」とが対をなすので、「自悔」と読むのがよいとする。秦樺林も「自悔」は典籍中に常見するとして程説に賛同し、『孔子家語』を引用する。竹簡上部の欠損により、確定はしがたいものの、直後の「過有らば能く改めよ」という一文との関係を考慮すると、程少軒が指摘するように、「自悔」（自ら悔い）と読むのがよいであろう。

(13) 原釈文は、「鄰」を「奉」とし、奉承（諂い）や順従の意で、この二句は、諂わない者はよく諫言でき、同調して諂う者は、心中は（君主の心と）一致していないことをいうとする。この解釈に従う。

(14) 原釈文は、「逫」とは「路」、「大路」とは「大車」であるとし、『礼記』明堂位の鄭玄注「大路とは木路なり」を引くが、上部が欠損しているため文意は不明。

(15) 原釈文は、「敦」は「戟」であり、古代兵器の名とする。また二字目の「蔵」字は「栽」であり、「植」の意とする。聯合読書会は、包山楚簡二七〇号に「彫敦」とあるとして、李家浩の「彫軫」とする説を紹介する。また、第二字目を「蔵」字に隷定。程少軒は、「敦」とは「繚」である可能性を指摘し、『楚辞』九歌の「繚之兮杜衡」を引用して、生い茂ることとする。「楮」字は第一簡にもみえ、そこでは悪木と解した。ここに登場する「蔵」や「楮」も悪木と解し、「敦」は「繚」（生い茂るさま）であるとする程少軒の説を参考にすれば、ここでは悪木が盛んに生い茂るさまをいうことになろう。

(16) 原釈文は、第一字目を「鹿」字に隷定し、「獨」字に音通するとし、また、第二字目の「尻」は楚簡の句法からみると「処」に通じ、「居処」の意とする。聯合読書会は、楚文字の「鹿」は「麗」に作ることが多いとし、「麗」は「離」に読むべきとする。下文には、「同欲」（欲を同じくせん）と、思いを一つにすべきことが求められており、その理由としては、「獨尻」（「作者が」獨り尻（お）る）よりも「離尻」（「作者が保子と」離れて尻（お）る）のほうがより適合する。したがって、第一字目に関しては聯合読書会の説に従い、「離」字で読むことにする。

(17) この箇所について、原釈文は「将莫皇（惶）」と隷定し、「恐れる必要はない」との意とする。聯合読書会は「莫」字は「慕」と読む可能性があるとし、「皇」は「凰」であるとする。第一簡にも「皇」字が登場することから、統一的に「凰」で解するのがよいと思われる。その場合、文脈上「莫」字は動詞、或いは動詞的な用法で読むことになる。聯合読書会のように「慕」とするか、或いは「莫」のまま「皇（凰）を莫（うしな）う」などの読みが考えられるが、ここでは聯合読書会の説に従うことにする。

(18) 原釈文は、「女=」について、「女」字の下に重文符号がある

として「女女」とし、さらに上部の「女」は「如」であり、「如女」と読むべきとする。

(19) 原釈文は、「將」字の下の「 」字を「淋」に隷定するが、聯合読書会は、水に従い眔に従う「泣」字であるとし、郭店楚簡五行篇簡17にみえる「泣」( )字との関連を指摘する。郭店楚簡等との関連を重視し、聯合読書会の見解に従うこととする。

(20) 原釈文は、「余子」の上の一字を空白(□)とするが、聯合読書会・黄傑・張峰は「若」字に隷定しており、これに従う。なお、黄傑は、第五簡の「若」字の上部が第三簡末尾にみえるとして両簡の綴合を指摘する。しかし、そうするとこの一句は「慮余子其速長若余子力今兮」のように、不自然に長い句となる。したがって、配列に関しては元のままとする。

(21) 原釈文は、第一字目は「族」で「奏」に通じ、節奏(リズム)の意として『荀子』非相篇などの類例を引用する。そして「奏緩緩必慎毋勞」とは、リズム(規律)は緩やかでも疲れてはならないことをいうとする。

(22) 原釈文は、「視」とは「看待」(待遇する)、「対待」(対処する)の意、「誑」とは、「欺騙」(だます)の意とする。ここでは、日月が光り輝いて「三誑」(様々な偽りや悪事)を照らし出すので、決して「三誑」が用いられることはない、との意であると思われる。したがって、「視」は「示す」の意で読んでおく。

(23) 原釈文は、「論」とは「命」であり、告げる意であるとする。

(24) 原釈文は、「旁」とは「謗」であり、「三夫之謗」とは、大勢の人の誹謗流言を指すとする。「三夫」とは、三人の有力貴族といった実際の人物を指す可能性もあるが、今は原釈文に従っておく。

(25) 原釈文は、「膠」とは古代の学校名、「膰」は古代の祭祀用の肉であり、「膠膰」とは学校に送る祭肉のこととする。そしてこの句は、多くの人が本篇の詩人が、「膠膰」という良い待遇の誘いをうけて教職についたこと、すなわちその動機が不純であることを誹謗するものと解する。しかしながら、ここで作者は「膠膰(こうはん)もて余を誘え」や「膠膰の精なるを」など、みずから「膠膰」を要求しており、整理者のいうように、これを小人からの批判の内容と捉えることはできない。

(26) 原釈文は、「蜀」は「嘱」とし、「嘱命」は嘱咐(いいつける、たのむ)の意とする。聯合読書会は、「蜀」を「獨」とする。後者に従う。

(27) 原釈文は、「腈」は「精」であるとする。

(28) 原釈文は、「論」は「命」字で告訴の意とし、「命夫」の「夫」は、上文によると衍文か語気詞であろうという。また、「猜」は「請」であり、請求や要求の意であるとする。確かに、「命夫」の「夫」に関しては衍文の可能性もあるが、今はそのまま読んでおく。